

① はじめに

2 授業の概要と先生の願い

社会科の授業で「観光プランをつくる」という場合に問題となるのが、子どもたちがどの立場でプランをつくっていくのか、そして、観光プランづくりという学習活動と社会科としての学習内容をどのように接続していくのかということであろう。前者から述べていくならば、対象となる地域を外在するものととらえるのか、自分もそのうちに含まれるものとしてとらえるのか、そして、社会的な課題に対して小さな政策立案者としてアプローチするのか、小さな市民・地域の主役としてアプローチするのかという問いは、「児童に育てるべき市民的資質をどのようなものととらえるのか」という問いと直接的に関わってくる。この点に関して南学級の子どもたちは、1人の消費者として、自分たちの日常生活とは切り離された場所の、興味をもったものについて紹介し合っていた。また、南先生も、決まり切った答えを発表することはできるが自分の考えを発表することには自信のない子どもたちに対し、提案まで修正を繰り返しながら粘り強く探究すること、そして、県庁観光振興課の方という大人に提案するという経験を通して自信をつけていくことを願いとしてもられた。このことを前提に、観光プランをつくることを通して、どのように子どもたちの社会科としての力をつけていくことができるのかを考察していきたい。

③ 地域価値の創造と観光プランの提案

本稿では、このゾーン、コンステレーション、トポスという3つの要素を援用しながら、観光プランづくりについて考

えていく。

4 観光プランづくりと社会科学習

(1) 授業後の協議会から

授業を参観した 11/26(火)の放課後、授業者の南先生、梶本教頭先生、筆者(岩野)の 3 名で協議会を行った。

2 で述べた子どもたちの実態と教師の願いを前提にしても、課題として残ることが指摘されたのが、子どもたちの空間的認識の弱さ(前ページ「児童が作成した観光プランの例」であれば、内原王子から那智大社までを 1 日で踏破することになっている)であった。また、自分たちが見つけた観光地をより多く紹介しようとするあまり、1 つ 1 つの観光地が「見るだけ」に終わってしまっていることも指摘された。

これらの課題を克服するために指摘されたのが、グループで 1 つの場所を決め、その人・もの・こと(自然・産業・歴史・文化)をじっくりと調べることであった。自分たちの「おすすめ」の場所について深く調べ、それをクラスとしてつなぎ合わせることで観光プランとして提案する方法である。

これを 3 で紹介した地域価値創造のための地域デザインの要素で読み替えるならば、トポスを発見していくこととなろう。地域を構成する諸要素とそのつながりを探究することは社会科学習の基本であり、その意味でオーソドックスな社会科学習の方法と言える。

しかしながら、子どもたちが発見していく地域の魅力(人・もの・こととそのつながり)はすでに地域の方によって創られたものであり、その「発見」は子どもたちにとっての発見に過ぎないという課題が残る。地域に見られる相互依存関係は社会科の主要な学習内容であるものの、それを探究するだけでは、子どもたちが既存の社会を「よいもの＝変革する必要がないもの」と受けとめてしまい、結果として、社会化を強いる学習になることが危惧される。それでは、このような課題を克服し、子どもたちが新たな社会を構想していくことに繋がる観光プランの提案は、どのようにしたら可能になるのだろうか。

(2) コンステレーションとしての観光プランづくり

上記の課題を克服するために提案したいのが、「コンステレーションとしての観光プランづくり」である。ゾーンに点在する資源により大きな価値を付加するためのシナリオを描き、それを観光プランとして提案していくことと言えよう。

それでは、このような観光プランづくりは、社会科の学びとして成立しうるのか。もう一度、前ページの「児童が作成した観光プランの例」を見ていただきたい。2 つの特徴が指摘できよう。1 つは、内原王子、熊野那智大社、飛龍神社の 3 カ所を取り上げているが、そこに「信仰の旅」という意味づけがないことだ。「熊野古道 やすらぎの旅」、「和歌山県にしかない自然を歩いてまんきつ！」と題され、「ながめがさいこう！」(内原王子)、「高さ水量が日本一

のたき！はく力まんてん」(那智の滝)、「おちついた はいでん」(熊野那智大社)という解説がなされている。そして、もう 1 つが、まさに観光「地」をめぐる旅となっており、「人」もその場所で体験しうる「こと」も登場しないことだ。

1 つめから考察していきたい。やや古い調査になるが、国土交通省近畿運輸局による「観光圏整備事業予備調査報告書(和歌山県)」(平成 20 年 3 月)によると、和歌山県内で今後してみたい観光・レジャーで「名所・旧跡巡り・古道ウォーク」は、「温泉」(63.4%)に次ぐ 2 位(31.1%)となっている。また、今後新たに、あるいはもう一度行ってみたい所でも、「那智の滝」(32.8%)は、「白浜温泉」(38.7%)に次ぐ 2 位である。さらに、和歌山県で観光目的として楽しみたいことで「風光明媚な景色」は、「海の幸、山の幸、名物の食べ歩き」、「豊富な温泉めぐり」に次ぐ 3 位となっており、子どもたちの考えた観光プランは、和歌山県を訪問する観光客のニーズに合ったものと言えるだろう。このような、いわば典型的な観光客の 1 人である子どもたちが考える「やすらぎ」、「自然を歩いてまんきつ」という価値は、実は、和歌山県観光振興実施行動計画のなかで完全に看過されているものである²。もちろん、県の計画の方が、滞在型、体験型という今日のツーリズムに求められているものを反映しているのであろうが、消費者である子どもたちの意識との乖離は否めない。

それでは、子どもたちの考える「やすらぎ」、「自然」とはどのようなものであろうか。ここからは思いつきに過ぎないが、例えば、google で「自然×やすらぎ」で検索すると、自然の芳香液や森林浴などの案内が上位に出てくる。これらは(熊野古道と必ずしも結びつけられてはいないものの)既に和歌山県内でも熊野ヒノキのアロマオイルづくりや熊野古道ウォーキングツアーなどとして取り組まれているものであり、これらを結びつけることでコンステレーションを構成することが可能になろう。

そして、2 つめの「人がいない観光プラン」であるということについて。筆者には、このことこそが子どもたちの社会認識を端的に示しているものに思えてならない。しかしながら、上記で例に挙げた熊野ヒノキのアロマオイルづくりや熊野古道のウォーキングツアーといった「こと」を提供しているのは「人」である。コンステレーションによる観光ツアーづくり(一見関係のないものに関係をつくっていく＝新しい価値を創造していく)を実現可能なものとするためには、そのような、「人」の協力が必要不可欠なものとなるのではないだろうか。そして、そのような人の協力を取り付けていくために、自分たちの観光プランを地域の方にどう説明するかを考えていく活動を通して、人の活動が地域の変容をもたらしうること、また、地域の変容をもたらしうる活動とはどのようなものかについての認識を深めていく(＝社会認識を深める社会科学習としての観光プランづくり)につながりうるのではないだろうか。

5 おわりに

本稿では、観光プランづくりを社会科の学びと接続する

ために、トポスに着目するだけでなく、コンステレーションをつくり出していくことの重要性を主張した。トポスに着目した観光プランは、対象となる観光「地」を深く知ることによって提案可能になる。コンステレーションによる観光プランづくりは、その「場」について深く知るだけでなく、消費者である自分たちのニーズを現地の方とすりあわせる、いわば発地型と着地型の中間のプランを提案していくことになる。

「観光教育」という言葉が登場に出版もなされている。しかし、社会科や総合を軸にしたとされる実践が、観光立国のための「地域資源の価値を見いだせる人材育成と、そのために必要な深い社会認識形成³」であるとされている。社会科の本来の目標である市民的資質の育成との接合には、まだ相当な距離があると言わざるを得ない。今回は、この課題に対し、考察を深めていく機会となった。貴重な機会をいただいたことに、お礼申し上げたい。

¹ 浅野清彦・原田保・庄司真人「世界遺産の統合地域戦略デザイン」地域デザイン学会編『地域デザイン叢書 4 世界遺産の地域価値創造戦略 地域デザインのコンテキスト転換』芙蓉書房出版、2014

² 和歌山県・(後者)和歌山県観光連盟「和歌山県観光振興実施行動計画 観光振興アクションプログラム 2019」では、「和歌山を売り出す」ための 11 の戦略の 1 つとして「(3)『わかやま歴史物語』(歴史・浪漫)で和歌山を売り出す」があり、その成功例の 1 つと

して、某旅行会社による「やすらぎの霊場巡りツアー西国三十三ヶ所霊場めぐり」が紹介されているのみである。また、和歌山県の自然に関しては、上記 11 の戦略のなかで「(7)『自然の素晴らしさ』で和歌山を売り出す」があるものの、「自然を活用した誘客」としてはマリンスポーツとアウトドアスポーツが位置づけられているだけである。

³ 澤達大「エピローグー学校からの観光・地域人材の育成」寺本潔・澤達大編著『観光教育への招待ー社会科から地域人材育成までー』ミネルヴァ書房、2016、p.159